

Title	講演II「大学における教育環境モニタリング調査 ～慶應湘南藤沢キャンパスの実践～」
Author(s)	井下, 理
Citation	京都大学高等教育研究 (1997), 3: 128-133
Issue Date	1997-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/53510
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

講演Ⅱ 「大学における教育環境モニタリング調査 ～慶應湘南藤沢キャンパスの実践～」

井 下 理（慶應義塾大学総合政策学部教授）

こんにちは、ただいまご紹介いただきました慶應大学総合政策学部の井下理でございます。今日はたいへん高名なセンターにお呼びいただきまして、心から御礼申し上げたいと思います。また、尊敬する喜多村先生のお話を、ずっと聞いていたいなと思いながらメモを取ったりしてたんですが、もっと話をお聞きしたかったと思っておりました。

私は専門が高等教育と言うわけではございませんので、最近学会に行きますと、「井下おまえ最近、授業調査の専門家になってるんだって」というふうに言われることが多いのでございまして、「いや、からかわないでくださいよ」とかいう話をしたりしています。私だけではなく藤沢キャンパスにきた教員は、3年目ぐらいの時でしょうか、お互いに会うとアイデンティティー・クライシスという言葉がよく交わされまして、専門がなんだか分からなくなってきた。それからこんなに教育に力を入れていいんだろうか、という不安とも言えない気持ちを持っていました。エキサイティングでおもしろいんですけども、今まで自分が持っていた大学のイメージとかなり違うわけです。このまま研究をちょっとペースダウンしながらずっと教育ばかりやっていたいいんだろうかという不安は、今も正直言ってございます。そこらへんのジレンマを抱えながらも走り出した、今日はそんな話をさせていただきたいと思います。

私も30分というお話でしたので30分でどのくらい何にフォーカスをあててお話ししたいかと考えたんですが、最初に10分ほど藤沢キャンパスのお話をさせていただいて、後は私が担当いたしております授業調査のことにフォーカスを絞ってお話をさせていただきたいというふうに考えてます。

湘南藤沢キャンパスのことをただご紹介するというのでは大学説明会になってしまいますので、そうではなくて私は、今回タイトルとして、大学における教育環境モニタリング調査ということを題として掲げさせていただきました。これは本当は環境監査といいますか、監査という言葉は強いのでモニターとしています。つまり大学が今まで自分たちが提供したものについて本当に、例えば企業に例えるとすれば、わが社の製品が好まれているんだろうかということについての自己点検と言いますか、自分の提供しているサービスが受け手から見てどうなのかということについてあんまり反省や自己確認をせずに走ってきたのではないか。教員サービスがとにかく提供されさえすればそれは学生が吸収すべきものである、と考えてきたのではないか。それはありがたい研究の一端を教室に来て話をすれば、学生がそれを聞くべきであるという姿勢が大学一般にどっかにあったんじゃないかというふうに思います。しかし、本当はそうではなくて、視点を変えてみると本当にお客さんである学生が見たときに、彼らが今ほしいもの、今学びたいものについてどのくらいこちらが、教育サービスを提供しているのだろうかということから、やはり眺めなければいけないのではないかとございまして。今藤沢キャンパスではいろんなことがいっぺんに動き始めました。お手元の資料、今日は3枚ほど用意させていただいてますが、1枚目のところに概略、藤沢キャンパスのことを書いたものがございまして。90年の4月にできたということで大綱化以前にスタートいたしましたので、その後カリキュラム改革というのは、他の大学の方がむしろかなり自由なカリキュラムを作るという動きがあるのではないかと思います。1990年にスタートいたしました私は、それ以前、半年前には関わりを持ちました。けれども、今日は、着任してからということで、できてからその動きの中で大学がどういうことに取り組んできたかということについてお話ししようと思います。

まず何よりもどんなところなのかということを見て頂きたいと思いますが、周りは何もないということ変なんです、市街化調整区域でございまして、いわゆる雑木林のようなものがございまして。それで、そこに十万坪の校地で、ここに約4千名の学生、教職員合計約180名ということで、環境情報学部と総合政策学部の2つの学部で構成されております。今博士課程の1年生までおります。全体の女子の学生比率が約4割ということです。文系理系でいう意味でいうとちょうどその中間と申しましょうか、環境情報がやや理系よりで、総合政策は従来の枠でいうと文系の学部ということになりますが、実際は様々な意味でカリキュラムが一緒のところがございます。特に1、2年生に関しまして

は、まとめていろいろな混合のチームを作って、授業をやっております。そういう点では学部による違いというのが出てくるのが、やはり3年4年ということになると思います。3年4年でもゼミ、我々は研究会と呼んでおりますが、そういうところではどちらの学部のゼミをとってもいいことになっておりますから、両方の学部の学生が混ざって、勉強しているというような状態です。

どういう点が特徴か。個性的であろうと思って作ったというよりは、慶應大学は既に6つの学部を持っておりますから、それとは違う学部を作りたい、というのが石川前塾長のお考えだったようでございまして、いわゆる経済学部、法学部とか、そういうディシプリンで縦割りになった学部ではない、それを横断するような新しい発想の学部、それを目指したいということだったと聞いています。そしていくつかの言葉が我々の間で交わされます。

一つは、学生は『未来からの留学生』という言葉であります。これは加藤寛先生、最初の総合政策学部の学部長がよくおっしゃっていたことですが、学生は未来へ帰って、そこで活躍する。そのために昔からのものをただ詰め込むということでは役に立たないんだ。今までのままの延長線上に未来があるのならばそれはそれでいいのかもしれないけれども、未来はかなり不確定であり、今までにない問題がどんどん出てくるだろう、そういう時にどの社会であれ、その時代に活躍できる若者を育てることが大事なんだということをよくおっしゃておられました。それで『未来からの留学生』という言葉が、毎度学生の間で、あるいは教員の間でも広がっていったというコンセプトがじわじわと受容、共有されているということでもあります。

それからもう一つ、『問題発見、問題解決型』の能力を育成しよう、と。何かを覚えてそれを再生することが学習のゴールなのではなくて、自ら問題を発見し、それを位置付けて、それに対する解決への糸口を見いだすような、そういう創造性のある学生を養成したい。あるいは今まで日本はそうであったと思いますが、海外からのものを受信したり吸収するということに非常に重きを置いてきたけれども、これからは日本はどう思うのかと聞かれたときに、日本としてはこうしたい、というようなことが、自ら発信できる、あるいは何か新しいものを作り出せるようなそういう力を養っていきたいというようなことを目標に掲げたわけでもあります。

ということはどういうことかということ、やはり教育という言葉ではなくてむしろ学ぶ側がどう学んだらいいかということを我々教員サイドは支援するんだ、つまりあんまり上から教え込もうとするな、ということをよくいわれました。これは始まってみると、とても教え込もうどころか、我々がついていくのがやっとでありまして、例えばコンピューター一つをとりましても、4年生が知っていることと1年生が知っていることを比べますと、1年生の方が最新のものを習いますから、4年生は知らないんです。気の毒なことに今の4年が1年の時には、例えば今ホームページを開くHTMLの言語の学習、情報処理の授業で新しい技術を1年生はすぐ教えてもらえるんですが、4年生が1年生のときには、そんなものなかったんです。そうすると4年から見ると後輩は自分の知りたいことを知っていて、授業で習っています。ですから3、4年にリフレッシュ教育が必要になってくるわけです。4年生や3年生は先輩ゾラしているとどんどんおいていかれます。つまり後輩に、「それどうやってつくったの。」とか遠慮無く聞ける学生はどんどん後輩の学んだものを取り入れますから、それに自分のものを加えていいものができて来るんですが、聞けないと、置いてきぼりをくうわけです。そういう意味では1年生と4年生を比べてもそうですから、ご想像の通り、私達教員はどうするの、という話になるわけです。キーボード一つそうですから、あるいは電子メールどうやって送るの、たえず学生に聞きながらなんとかついてきているというのが現状でありまして、もちろん情報処理教育を担当しておられる先生方は別であります。私なんかは必ずしもそういうことに明るいわけではありませんので、たえず学生に聞きながらやる。そうすると、教育をするどころか学生からあるいは学生と一緒に学ぼうというのをしないととても学習支援どころか、教育などというのは全然、難しい。今極端に申し上げておりますが、逆に言うと何を本当に教育すべきなのかということを経り込んでいかないと、一緒に共に学ぶということはできません。そこらへんが、キャンパスが動き出してから痛いほど感じたことであります。

お手元の資料のどういう教育の試みをしているかということでございますが、一番目の専門横断的なということは先程申し上げました。二番目の学期制度、入学制度でございますが、これはセメスター制度でスタートします。4月と9月に入学をします。9月入学生は、まだ全体からしますと割合は非常に少ないんですけども9月入学生もいる。逆に言うと9月卒業生もいるわけです。私たちは4月に始まって3月に終わるという頭、そういう季節感覚ができてますから、いきなり9月から入ってこれられても何となくピンとこない、例えばフレッシュマンキャンプというのが1

年生にあるんですが、それは4月にやるんです。9月にはないんですよ。これはある意味で非常に不公平なことなんですが、それから入学式も4月は日吉のキャンパスで全学部そろってやるんですが、入学式、まず規模が違いますから、卒業式にしても入学式にしても何となく9月入学生はある種の悲哀を感じながら、何で自分たちはこう……。というようなことが常にあると同時に、我々も1年は4月に始まって3月に終わるということが抜けきらないです。これはなんとか変えていかないと本当はセメスター制、あるいは入学時期を2回にしたということは、心してプログラムをやらなければならない。ただはっきりしていますのは、いままで1年に1回、教員として申し上げますと1年に1回成績をつければよかったのが、2回やらなければならない。するともう入学試験を2回、それから試験の採点も2回、いろんなことが全部2回になります。

それから入学試験の形態も多様化しました。AO（アドミッションズ・オフィス）による入試が年に4回・（面接）があります。そうすると土曜日なんかもしばしば入試面接が実施され、昨日も実は面接がありました。それから学部だけの場合はまだいいんですが、大学院までできると大学院の入学試験だとか、修了論文などももう大変、という感じなんですけれども、いずれにしてもそういう状態です。それから入試制度はアドミッションズ・オフィスの入試という、推薦入試に近いものなんですけれども、自己推薦で高校の評定平均値4.0以上の学生さんが自己推薦で応募してきて、書類審査をして面接をする。面接は一人30分で、教員が3人ぐらいつき合うんですけれども、それでだいたい概略900から1000の新入生のうちだいたい150人ぐらいの学生が毎年、AOで入ってくるということです。このAOで入ってきた学生は非常にのびのびとしておりまして、入学試験のために汲々と受験勉強をして伸びきったゴムのようになって入ってきませんので、割と朗らかにというかあっけらかんと、自分の関心が最初からありますから、それでどんどんスクールライフというかキャンパスライフをエンジョイしているというのが調査でもでてまいりました。

それからカリキュラムでございますが、これが有機的なカリキュラム構成ということで、あんまり一般教育と専門とかというふうに最初から分けておりません。情報処理言語教育と自然言語つまり外国語教育をメインにして、後はいろいろな技法科目といわれている。いわゆる社会調査法ですとか、データ解析法ですとか、必要とされているものについては2年生のうちにがっちり学ぶ。知的基本動作をそこで教え込もうとするというような形でトレーニングする科目が、2年生に多く配置されています。ここであげましたのは授業担当者による教員の研究会でございます。これはSFC、湘南藤沢キャンパスのことをSFCと呼んでおりますが、SFCのスタートする半年前から実施されていきました。着任が予定されていた教員は将来同じ同僚になるであろう人々を前にして、自分のこれまでの研究経歴、担当科目、それから細かい授業計画を一人1時間半ぐらい話をして1時間ディスカッションというので毎週土曜日に2人ずつ、教員の前でお互いに情報をシェアする形でやりました。そうすると例えばある経済学の先生が話をして自分はこういうふうにして、前半はマクロ経済をやって後半はミクロとか、そういう話をしました。そうすると終わってからディスカッションにはいると、全然分野の違う先生がどんどん手を上げて、例えば一番後ろに座っておられたフランス語の先生が「中身はよくわかんないんだけど先生の語尾がどうもはっきりしない。これは学生になった気分で聞いていると、語尾がなんなのかわからない。その語尾をはっきりしていただけると、学生はきっと喜ぶんじゃないでしょうか。」などという、そういう割と遠慮のない意見の交換をしながら、かなりオープンに討議されたのを今でも思い出します。その教員同士の研究会が終わらないと「正月が来ないな」などと言いながら、戦々恐々とやったのを今も覚えております。その他大きな点は授業シラバス、これはもうかなり普及して参りました。授業計画表を作る、これもセメスター制にしていきたい15回、半期15回なのでシラバスができるじゃないかなという感じもしているんですが、1年間通年30コマのシラバスを作ってその通りいくというのは、かなりたいへんです。15週でも作ったとおりに必ずしもいかない時がありますから、受講者に応じて多少変えるということはありますが、いずれにしても履修案内、あるいは履修要項といわれるもの以外にシラバスを毎学期各授業の1時間目に担当者が教室に持って行ってそれを配ります。これは、こういうA4の紙ペラペラのものを配ります。ですからよくシラバスというとこれはたぶん文部省対策なのかと思うんですが、まとまってとても持ち歩けないような、ある大学に聞きましたらあんまり厚くて持ち歩けないのでサーバーの中に入れたという話を聞くんですが、それだとあんまり使い勝手がよくないと思うんです。シラバスは本来一枚一枚バラバラで各学期の授業開始の最初の時間の頭に配ります。それをもらって、学生はその授業でどんなことをやるのか、あるいはどういう方法で採点しようとしているのか、課題はどのくらい、いつあるのかが分かって、履修申告の検討に入るわけです。つまり今まで、また大学を企業に例えるとけしからんとおっ

しゃる方もいらっしゃるんですが、製品の中身をあんまり明細化せずにわが社の製品は素晴らしいですよ、といって売ってしまっていた状態に似ています。中に何個何が入っているのか、弁当で言えば海老は入っているのかあるいは卵焼きは入っているのか、そういうことをあまり詳しく言わずに、この授業はミクロ経済学です、とか精々5行ぐらいの講義案内みたいなのがあって、学生はそれを見て取らなければいけなかった。そうではなくてやはりきちんと内容に関する明細書を配るべきであろう。そしてそのことをきちんとやるべきであろう。それは対学生と教員の間だけではなくてお互いに教員同士があの人は何をやっているんだろうか、つまり中身はどんなことを教えているのんだろうか、いつどこまで進んでいるんだろうか、ということがお互いに分かりますから教員同士の情報交換という意味でも非常にプラスになっているというふうに思います。

後は時間割とか、補講制度。補講制度というのは、休講があったら必ず土曜日に補講をするということになっておりまして、今までですと休講が続いても休講の理由が学会出張だったりすると、しょうがないか、とか、あるいは学生も休講が出たときは喜ぶという、わけのわかんない話があるわけですけども、そうすると両方ハッピーだからそれでいいのかもしれないけれど、それだけではやっぱりよくないだろうということで、考えてみるときちんと何コマでこれを教えるといったら休講にしたら必ずどこかで補講をせざるを得ない筈なんです。そういう意味では補講制度というのをきちんと設けよう。その為に土曜日は全部あらかじめ設置された授業はなしであります。土曜日は補講の日というふうになっております。

そして後でお話申し上げる学生による授業評価、これは毎学期全科目、これは非常勤も専任も全て行います。その他自然言語の教育いわゆる使える外国語能力、何か文学書を読むということだけではなくて、使える外国語の教育をするということです。いろいろな言語がありますが、その語種の選択も、一定期間春学期の間、1年生はいろいろな授業を取りながら、つまり今週は朝鮮語週間、今週はドイツ語週間というふうにして設定します。これはそれぞれの言語を学んだらどういう文化なり世界がその先に広がっているかということを紹介して、それからその語種を選択し、秋からスタートする。授業は集中的に午前中は全て外国語の教育に当てられます。これは3学期つまり1年半、1年生の秋から2年生の終わりまでずっとなされています。それから自然言語教育と同様に情報処理教育が全員に必修に課せられています。特に全員に課せられているのは、比較的初歩的なものでありまして、最初の春学期のうちに電子メールを使える、あるいはレポートを書く、あるいは最近の1年生はインターネット上に自分のホームページを作って自己紹介をするというような形で発信をする、ということをしています。全員がラップトップのコンピューターを強制ではありませんが、ご紹介をして買っていただくという形です。若干市価よりやすい形で推薦するということで

後はキャンパスライフについては詳しくお話しする時間ありませんので、少人数に分けてアドバイザーグループを作る制度とか、あるいはオフィスアワーはこれも珍しいことではないと思いますが、必ず週に1コマ、教員は研究室にいて授業を取っている取っていないに関わりなく質問を受け付ける、研究室に話をしに来ていいですよ、という形になっています。

さてそれではちょっと授業調査の話をしていきたいと思います。

授業調査は毎学期行っておりますが、学期の最後に必ず授業調査を行うということです。何のために授業調査をするかということでございますけれども、まず大学の教員は学生の採点をしたことは多々あるけれども自分が学生に採点された経験は少ないということだと思っておりますけれども。米国の場合は、例えば授業調査をすることによって、学生による授業評価で、教員の人事考課の資料を作るとというのがございます。私が大学院生として留学しておりましたときも確かにそういうのがあって、つけるときは非常に楽しいわけですが、立場が変わると今度はつけられるときはこんなに楽しくないのかという実感をしました。それで実はアメリカでは、学生による授業評価のスコアでテニユア（終身雇用の機会確保）になるかどうかを、やはりそれだけで決まるわけではないんですけども、それを考慮しているようであります。あるいは、前の学期に取った学生がその授業がどうであったという授業評価が、その学部の廊下に貼り出されます。そうすると誰にでも各々の授業のこういう点がおもしろそうだというのが分かりますから非常に履修の時の参考になるわけであります。SFCができて最初の教授会の時に授業調査をやりますと説明された時、条件が2つありました。1つは個別に先生方のお名前、あるいは科目名がわかる形で結果が出ることはないということ。それからもう1つは人事考課には用いないということ。この2つを基本ルールにしてスタートいたし

ました。何を目標にするか。これは授業調査を全体でやることによって「担当者による自己改善、授業の改善をする」ことです。改善のためのデータを一括して取りましょうということなんです。個々の先生は、授業調査システムがあるなしに関わりなく、改善の熱意がある方はいろんな形で授業調査をなさっていらっしゃるわけですが、その手間を一括して大学の方でまとめてやりましょう、ということです。改善をするということを非常に重視しております。私はたまたま社会調査法を担当するというところから、井下おまえ社会調査法を担当するんだから授業調査を担当しろ、とか言われているうちに授業調査をずんずんとやることになりました。実は、教材教授法開発小委員会という委員会がございまして、そこで授業調査の管轄をやっていたんですが、そのままずっとやっておりまして、その関係でやっている、別に昔から好きでやっているわけじゃないし、研究テーマとして昔から授業調査をやっているわけではないんです。ちょっと誤解があってはいけないこともないんですが、そういう経緯で担当することになったということです。

授業調査の結果をどんなふうに使っているかということでございますが、集計結果が担当科目別に出ます。それから全科目の傾向も出ます。それから講座別オプション設問と申しますのは、各授業でいろんな授業があるわけですから当然、授業評価項目が違っていいはずでありますから、13問の設問と3問オプション設問というものがありまして、例えば自分は今学期ゲストスピーカーを呼んだと、そのゲストスピーカーがよかったという項目を入れることができるわけです。よく海外旅行のバックの旅行でオプションツアーというのがありますけれども、あそこからヒントを持ってきて、オプションをつけたわけですが、個別の授業の特徴をできるだけ評価できるような設問を拾うということで3問ほど個々の先生が自由に質問を設定できる仕組みを作りました。これはお手元の資料の2番目のところに授業調査の細かい点、どんな設問が用意されているかというのは43ページのところにございます。A4裏表の調査用紙1枚でございますが、13項目を表に、5段階評価でそれを聞くというものであります。

そういう授業調査をやっておりますと、実はいろいろなことが分かって参ります。他の先生と比較することが目的ではございませんから、累積していきますとだんだんどういうふうに全体としてはスコアが上がっていったのか、あるいはなかなか授業調査の結果のスコアが上がらない科目というものもある。そんなことがわかります。これは担当者の努力とはまた別なところで、勿論それもありますけれども、そもそもその科目の持つ性格からスコアが他に比べて低いというものもあるわけです。いずれにしても個別に各先生に結果をお戻しして見ていただいて、次の学期の参考にしていただくという形で、行って参りました。それとその結果は、委員会の方では様々なクロス集計をした結果が出て参ります。一番肝心の学生さんに対してどういうふうに結果のフィードバックしているか。これはできた90年の秋学期からやっておりますが、ビデオを作りましてそれを学生に次の学期の始まりのガイダンスの時にまとめて見てもらっているということでございます。今日はちょっとそれを途中とばしますけれども、どんな感じのビデオなのかということをご覧いただければというふうに思います。(授業調査の結果報告用ビデオを一部紹介)

ちょっと時間もありませんので、こういう形で今回はかなりマクロ的に、今まで6年間のデータを入れて7年間の傾向を見るというようなことが、これはたぶんシステムを変えずにいけば、こんどカリキュラム改革をするんですが、変えたときに前と比べてどうかということが分かりますから、そういう安定したスケールを持つことができるわけです。それから細かくブレイクダウンしていきますと、例えば情報処理言語教育は最初、結果があまり良くなかったんですが、それでもかなりどんどん上昇している。外国語教育もそうです。そういう科目ぐるみのスコアの違いで、それぞれのグループの先生方に、「先生のグループ、最近ちょっと低調じゃないですか」というようなことを何となく言うようなこともできるんですが、「逆にやっぱり調査結果で出ましたか？」とそういう会話が可能です。つまり調査結果で初めて分かるのではなくて、なんとなくいろいろと感じている、そういうことが自分たちの感覚だけではなくて、データとしてもきちんと把握できるという、メリットがあるわけです。そこから、もうちょっと詳しいデータを出して下さいという要望も出てきて、それにも対応しながら、一緒にいろいろと考えながら授業の質的な維持、向上ということを図っているシステムでございます。まだ、いろいろ学生サイドから見た時に本当に授業調査が授業改善につながっていると思うかということも調査をしたいです。こんなに調査の多いキャンパスは初めてだとおっしゃった先生もいらしたんですが、いずれにしても学生がいいこと言いました。「先生方がすごく熱意を持ってやって下さるのは分かるんだけど、ときどき“勘違い”しているところがあるんじゃないか」と。この“勘違い”を発見し、そしてそれを改善に持っていかなければなりません。でないと何が問題発見、問題解決型を目指す教育なん

だ、と問われてしまう。勘違いすることは人間には起こるんだからそれを認識しよう。また、「善意があればいい Quality の教育ができる、という保証はどこにもない」と考えよう、と。教員も学生もお互いに「そこらへんは、もうちょっとこうした方がありがたい」とか、あるいは「ここら辺は先生そんなに力入れなくてもいいですよ」、というようなことを学生も、教員どうしも情報交換しながら、一緒に作っていく、それが授業であり、また教育のすてきな側面なのではないかと考えております。そういった発想から授業改善のためのシステムになっているということでございます。時間もだいぶオーバーしてしまったようですので、この辺でとりあえず終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。